
侵略!! 箱入り生物

とりお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侵略！！ 箱入り生物

【Nコード】

N7414X

【作者名】

とりお

【あらすじ】

タイトルは後付で、イ○娘ちゃんとは一切関係ない作品です。触手と美少女でない何かを絡ませたらと書きはじめて、SSの一発ギャグと予定してたのですが、削る作業が上手くないのと、果たして文章として楽しめるものを書けたのかと投稿してみることになりました。

(前書き)

読んでもらえただけでも十分なのですが、批評もらえるとありがたいです。言葉を選ばず気軽に「どこが余計と思う」「ここが分かりづらい」とコメントいただけると、とても嬉しいです。

ちよいちよいパロディ(?)といいますが、宮崎監督あたりのネタを使っていますが、こう言ったものも二次に分類されるのでしょうか……？

あと何度もヌルヌルや臭いなど繰り返しているため、不快感を抱く方がいるかもしれないと思い、一応R-15指定しております。

日が高い頃には翡翠、瑠璃、海抹茶に象牙色と浜辺だけでも随分と色彩豊かな光景。都会の一切の騒音から解き放たれて、ダイバーたちに最後の楽園とひっそり愛されるこの半島、ウーラに住むアフロとそのオカン（母親）。

別にダンサーだとかアフロディテからついたあだ名ではない。単に記念でパーマをかけようと、近所の美容室に住む同級生ヘドリルを依頼した結果、失敗に終わったと告げられる。

だが被害者は、文化祭でステージに出る――と自身が口走ってしまったことによる確信犯だと看破していた。

その半島とリグーと呼ばれる本島とは陸続きで、遠くない昔には潮が満ちると道が途切れて周りが海で埋まってしまい、完全な島になっていったという話だ。

大小いろんな口承文芸の舞台として、そこそ有名な観光地らしいが所詮は田舎で、昨今の子ども不足がここにも徐々に足を運んでいる。

オカンは本島の方で店を出しており、腕前は一級品だが客は減ってきているらしく、払拭しようと新メニューを考案中で連日泊まり込み。このままでは店を畳むかもしれないなどと愚痴をこぼす。

そしてオトン（父親）はちょうど10年前の今日、海難事故に遭い暗い水底へ。当時6歳になったばかりのアフロには、人魚に船ごとさらわれて、海へと還ったと伝えられた。

なのでその頃より家には大抵ひとりきり。その幼心に人魚話を信じこみ海へゆけば逢えるものと、じっちゃんの釣りに寄り添い、手を引かれて浜辺へ足を運び続ける。

やがてその浜辺、少し奥の港や防波堤の辺りへと釣りをするようになっていった。

空が山吹色や蜜柑色のカーテンを広げている。しかし辺りは動くものをも暗いセピア色に飲み込み、目に映る物を異形に変貌させる逢魔ヶ刻。

さざなみが一重二重と覆い被さり、砂浜へと年輪を描くように侵略する遠浅の海岸線。辺りには海藻たちがミイラと化した臭いが漂っている。

もう数刻もすれば海を縦に引き裂く夕日は、白銀の月に追い落とされて潮騒と虫達の悲鳴が始まる。

夜釣りをする時と変わらないはずの浜辺に、何やらいつもと異なる気配がする。その時アフロは夢の中、冷気が撫でる背中をポリポリと搔いている。

浜辺から少し海に入った辺りに一際、色の濃い部分が見える。

クラゲがたゆたうように、影はゆっくり波打ち際へと押されてきたかと思うと、突如音もなく海面が盛り上がる。

水の塊が引くとそこには、人間ほどの大きさのテラテラとした影が、すでに向こうの松林へと進み始めていた。

影がふと動きを止め、海藻とヘドロで泡が弾けるような粘った音を排出して移動を再開。松の足元では虫たちが息を殺す。

防砂林の向こうには、あまり客の入らなさそうなコンビニと、最終がひどく早いバス停があるのが分かる。

物体の背後にはナメクジ這った跡のような粘りのある液体と、重苦しい異様な雰囲気と臭気が道を作っていた。

一方、二人で住んでいても広すぎる家で眠るアフロ。髪のことを忘れようと布団に潜り、本格的に眠っているようだ。アヒル口からよだれを垂らしながらポリポリと腹をかき、オトン——と寝言を伴いだらしのない寝相を晒していた。

海から現れた物体の周囲が住宅地に変わるころ、空は藍色へと染

まり、星は物語の登場人物を形どりはじめる。街灯の少ない田舎町らしく、見通しはあまり良くない。やがて辺りは暗闇へと包まれていく。

物体が尾を引く構造色が示す先は、どうやらアフロの眠る屋敷のある町らしい。

事故でもあったのか、海のほうでサイレンが響きわたる。

暗闇にまばらに立つ家から漏れる光は、まるで祭壇へ誘う灯籠かがり火の如く怪しく煌く。そしてその社に建つ家の頭上には満月にはやや欠けた、白銀の鏡が不吉な夜の福音を告げる。

近所の美容室のポッチが遠吠えをしている。しかし何かの気配に気づき、しきりに虚空へ向かって何かを訴え始めた。

薄暗い景色からぬるりと怪しい艶を帯びた穴が、濡れた布が張り付くような音と共に近づいてくる。

怯えたようにけたたましく吠え立てるポッチ。家の柵と異形の影とが重なった。

無謀にもポッチは雄叫びをあげ叫び突進する――が影が停止した瞬間、断末魔と色の濃い液体が飛び散り、辺りはすぐに平穏を取り戻す。

物体の通り過ぎた後には無残にも、白目を向いて口に泡を伴い舌をだらしなく出したまま、ヨダレなのかも分からないほどに液体にまみれた、ポッチらしき肉の塊がぴくりぴくりと痙攣し、それはやがて動かなくなる。

犬猫がサイレンに反応するのはいつものことで、家のものは誰も気がつかず、おばさんたちは電話で盛んに噂話をしていた。

閑静な住宅街から、少し離れた丘の上の一角。

祭壇の場所にはアフロの家。無駄に広いその家には、今はじつちやんの骨董品で半分蔵と化しているが、釣りの道具や水槽、漁道具の倉庫がある。アフロはオトンの残り香が強いその二階を、あえて自分の部屋としていた。

寝息だけが響く中、頭髮が子羊の眠る部屋の窓が開け広げられ、奥からやけに湿気とヌメリを帯びた影が入り込んでくる。

アフロが16を迎えた夜、そいつはニユルリとやってきた。

暗い部屋の中、机には付けっぱなしのPCが、飾りつけのないスクリーンセーバーで、ほんのりと机の上と隣の本棚の端を照らしている。

机には写真立てや幾つかの小瓶が乱雑に置かれ、人気のラブコメノベル、本棚は下が本で埋まり、上部には箱やら人形やら置物が薄く照らしだされていた。

グポアッ………ヌヂャリ。

粘りを帯びるものが噴き出る音、そして滴る音で徐々に夢から引き戻される。周囲には湿気を帯びて生理的に気持ち悪い臭気が漂う。ワカメまだ詰ま——犬こわ——吐いた——などと、合成音声のよくな不可解な雑音が響く。

きつとまだ夢の中なのだろう判断するものの、嗅覚と触覚はしきりに何かを訴えている。

………うん………生臭………暑苦しいな。

徐々に目が醒めてくると、大好物の味噌煮の匂いも微かに漂ってくる。普段は大陸の有名店に持って行かれて、漁師町の地元でもめったに食えない幻の鯖を使った逸品だ。ただタイミングの悪いことに今日は団体の予約が入り、美容室から戻ったときにはオカンはもう居なかった。

……ああ、作り置き温め直してたんだっけ、まあ冷めてもメチャウマだから関係ないけど。オカン泣きそうな顔でごめんねって言うてたなあ、別にいいのに。

だが猛烈に苛立ってはいた。

寂しいからでも臭いからではなくて、いや臭いけど、生臭いのは嫌いではなくむしろ好み……じゃなくって、オトンの夢を見ていたからだ。

せっかく久しぶりに会えたのになぁ、とごちる。

常に日焼けして赤黒い肌のオトン。ソレによって強調される輝く歯を見せてニッコリといつも笑っていた。隣には幸せそうに寄り添うオカン。

その昔、オカンはフアンクラブがあったというほど、自称島一番の美人とのことで、町をモビーディックとかいう大王イカが襲来し、生贄の乙女（笑）に求められるがオトンに救われ一目惚れ、そしてその後すぐに結ばれたのだという。

ただ結婚前に一度、その後の式で出会いとなぜか計算が合わないほど大きなお腹のオカンを見て勃発する、ファンの連中との二度に渡る死闘は、大王襲来より語り草だ。

最初から最後まで胡散臭いことこの上ないけど、別に真偽はどうでも良い。ただ妙に正義感あふれるオトンを大好きだったことには違いなかった。大きくなったら——なんて可愛らしい事言ってた時期もあったらしい。

本格的なパーマがはじめてだからか少し頭皮が痒くなり、アフロをかこうとするが、手が上がらない。部屋の真ん中にヌメリ湿った気配と、うじゅるうじゅると何かがうねる音がする。

PCのほんの僅かな明かりに目を凝らすと、テラテラと輝くボデイ。ぬらぬらとテカリうごめく長細いもの、触手だ。数本確認できた。

……人じゃあないな、ハ―イ通報通報っと。

しかし体を起こそうとするが身動き出来ない。

ん、回想おわったようじゃ——とまた意味不明なノイズが走る。

「イカカカカ。キサマら人類はココかりや我輩に侵略されるのじゃ！」

通報の気配を察したのかこちらの思考を遮り、鼻栓して発するよ
うな人を小馬鹿にした高音が耳に入る。

うわあ安っぱ……三下臭ぷんぷんだけど、すぐに動きを止めてき
た辺り……ヤバイヤツ？

「げほっ、くさっ。何もんだテメエ」

過剰な湿度に少しむせた。

ん？アレ、こっちか？——とノイズが。

……ほんといろんな意味で臭すぎる。オツムも微妙なようだ。

なぜか抑えつける枷が消え、この隙に電気をつけようとコードに
手を伸ばすが、ヌメリで滑ってうまく付けられない。

目の前の物体は微動だにしない。

……あっ、やっと付いた。

明かりがつくと、飾り気の少ない部屋が浮き上がる。

机の横だけでなく後ろにも似たような棚、こちらは中央に小さな
テレビ。ベッドにはダッシュボードが付属して、その上には小さな
観葉植物や、写真の入った小物が幾つか見える。

床には文化祭での出し物に使うための竿を模した棒、糊やタコ糸
にハサミ、自作のウィッグや化粧道具なんかが転がっていた。

すでに若干ぬめりに汚染されていたので急いで避難させる。

お、よく見える！あれれっ同類か？——などと聞き捨てなら
ないノイズを目の前の物体が発してる。

………あのお、触手を組んで真剣に悩んでる様子ではあるんだ
けれど、こちらとしても日焼けで赤いからって、同類にされるのは
とても心外なんです。

ええまあアフロで似た形状に見えるかもしれませんが！

思えばこの動揺で、謎の来訪者への警戒心と嗅覚が薄れてしまっ
たのかもしれない。

「……で、何だよてめえは？」

癪に障るので仕方なく繰り返した。

すると客人はようやく理解してくれたようだ。

「おそれおののけ、人類め。我輩はイカー――」

「いやどーみてもタコだろ？」

「っ――!？」

「とりあえずその『えっ、そうなの?』 ってのやめれ」

どこをどう見てもタコなんですけど。

なんでそっちが心外だって感じに？

表情どころか顔の位置すら微妙なのに、空気で心情が伝わる不思議。海洋生物のコミュニケーション法なのだろうか。

空腹のためか、意外にも調理考察ははかどる。

真っ赤ではないがピンクっぽい。粘膜を連想させるテラつきといい、腹ワタのようでとても美味しそ……いや気持ち悪い。でもって胴体部分はイカのように筒状でツルリとしておらず、丸みを帯びむしろちよつとゴツゴツ感がある。

刺身・醤油煮・塩茹で・竜田揚げ……コクコク、うん、どれもイケる。

伸縮してうねるはヌメるは気持ちが悪いの三拍子の触手が8本。本数に例外はあるらしいけど、人の頭3個分もないだろう胴体部分に対して、床を埋め尽くさんとするそれはタコイカにしては長すぎる。身がしまって弾力がありそうだ。

タコヤキ作り放題だな……ゴキュリ、よし、食い切れない分は燻製に。

でかい胴体を支えるためか若干不自然に真下へと密集して広がっている。ちょうど昔の漫画なんかに出てくる火星人っぽい。その裏にはイカの噛み付くようなギザギザがなく、吸い付くような形状で煮込むと柔らかくて美味だろう吸盤がそそる。

ギュギュキュウルル……失礼、腹の音。

そして墨などを吐く漏斗が胴体正面、目に当たる左右サイドにあ

るレンズのちょうど中央に配置されていた……むう、目玉も食っていいよな。良く見ると気持ち程度にヒレが乗って――

――んうつ、ヒレ？

「ひえっ？」

思わず声が出た。裏返り気味でちよつと耳が熱い。

………えっ、イカなん？ ……いや、やっぱどうみてもタコ。違いはキリがない。

釣りや漁師町育ちで、目利き主婦並にはそちらさんの生物に見慣れているはず。

観察すればするほど妙にバランスの悪い部位を除いて、特徴はどうみてもタコと告げているが、正直少し揺らいでいた――

「わっ、我輩はっ、由緒正しい海洋の魔人であるからしてっ」
触手を振って訴える魔人。

「OK、了解。だから、とつと海にお帰りくださいませ魔人様」
――が、どっちでも良い事にすぐ気がつく。

すると魔人の胴体脇のレンズ部分から、トロリと液体が零れる。
……え、泣いてんのコレ？ 打たれ弱っ。

「タコなんぞと一緒にするでないわ、よく見りゃれ！」
一本の触手先が魔人の頭頂部へと向かう。

あっダメッ触っ――――

「このイカ族の王冠とも言えるヒあっ……」
ヌチャリ、と粘った音を立て不自然な部分は床へ落ちた。

――ハイ、タコでしたあああああゝっ！！

推測が確信へと変わる。間違いない、もう完全にタコ。

……ああ、乾き気味なのに触るからあ。

浮いてたんよ？ ずっと。

海洋の魔人とやらはギョロリとこちらの様子を伺っているが、哀れでいたたまれないので見ないふりをしていた。

好きな人とお喋りしていると、相手の鼻からピロロン「Hi☆元氣

「……って並みに気まずいんですけど！」

タコは吸盤で器用に拾い上げ、何事もなかったかのように頭につけなおす。

おい、それ縦だよ縦！ モヒカンかよ！ 笑えねえ。

「おっおそろもののけ、人類。わが——」

え、やり直しなん！？ 噛んでるし。

「なんだよそのとってつけた『イカカカ』って笑いはよ」

「イカー——」

「『イカにも』なんつったらぶっ殺すぞ？」

「っ——！？」

「その『なっ、なぜ心が読まれているっ？』ってのやめれ」

魔人は『ドドドドド』と、重低音がバックに書かれてそうな空気を醸し出している。

はああ。思わずため息がでた。

「イカって言いたただけだよな？ ズラ取れた時点でアウトだったの」

窓を開けてグイグイ押す。

ヌメるは臭いわ……あ、でも一際くっさいジツチャンの塩辛ぽく

……うん、悪くはない。

「ハイハイここは海産物が来ちゃいけないトコだよ」

「でもパパ……チチぎみとハハぎみが豚に……」

……なんだそのトンネル抜けたら神隠しっぽい言い訳。

「安心しろ、冷凍して送り返すから」

「フリーズドライの上に真空パックとはひどい拷問じゃ何気に細かい指定ですね。」

「鮮度はバツグンだろ、いいじゃねえか」

「しっておるか？ 水分抜かれるのじゃぞ、ミイラじゃぞ？」

「しりたくねーよ！」

「昔は凍りづけにされては、ひたすらヒット&スタンピングじゃ

……ああ、思い出しただけで鳥肌が立つわい」

「軟体生物のくせに鳥なんだな」

「ヒィィやめて！ 空気抜かないで！」

「テメエの面のが怖えよ！ そもそもチチハハ来てないからね！」

こっちがやめて欲しい。

「……わーったよ。じゃあまじょ——」

その時、魔人のレンズがギリリ煌く……気がした。

うん、なんだ急に。やんのか？

「——常温で運ぶの呼んでやるから。

早いところアラル海でも死海でも、出来るだけ遠くに帰ってくれよ」

「おお、どこか知らんが、美しそうな名前じゃな！」

生息できるかは知らんけど。

「おう、どこにでも行ってくれ、着払いでな」

「サメのヤツにたかれて、そんな予算はないのじゃ」

どうせなら全部平らげろよ。

「……なら歩いて帰ってくれよ」

「水のない道歩くの結構しんどいのじゃぞ？」

「しらねーから！」

「じゃからの？ ほら我輩、もう侵略せぬともうバス無いし……」

「はあ？ オタクこの悪臭ごとバス乗ったわけ？」

おいおいおい、せめてタクシーにしろよ、下手なテロよりたち悪いぞこのタコ」

「ぐっ、あれは高うて……いやじゃからイカ魔人じゃと何度言っておる！」

……まだ言いはるの？ 仕方ないな。

「うっさい、わーったわーったから。ちょっと来い」

チヨイチヨイ、と指4本で手招きすると、タコはなぜか触手を広げ奇声をあげはじめた。

「ニョワアアア……」

「ちげーよ、かかって来いって意味じゃねーから！」

ああ、ぶっ飛ばしたい。やっぱ箱詰め配送のが早い気が。
でも送り先がなあ……この産業廃棄物で海を汚すのもやだし。
……やっぱ自発的にお帰り願うか、生息地域調べるしかないかなあ。

はあ……………。

やれやれ、と付けっぱなしのPCで検索画面を表示する。

……ああもう、キーボードにヌメヌメついたし。

「おら、よく見る。まずイカってのは足が10本。

大半は透き通って白っぽくツルリとしてるわけだ。そしてなににより……」

うわーい、顔真っ青だよ、いや赤いけど。

「いやっしかしじゃな、ママ……母君がその、色白で透き通ってたし。」

こう輪郭なんかもシュシュツとしててシャープで——」

あたたた、複雑なご家庭ですか。種類が違うんじゃない？

「——クリオネのように美しく舞い泳ぎ、狩りの時は畏怖を抱くほど勇猛で——」

……おいおい、語りだしたよ。

「——佇まいは流水のように凜としていて壮大かつ厳格で——」

うっわ、キモ！ マザコンだったんすね。

ほんのり頬そめてんじゃねえよ！ 頬っぺたかわかんねえけど。

「——沖田くんのパパぎみもクラゲダコは綺麗って絶賛……」

「っておい今『タコ』つつったよな？」

「っ——！？」

「モジウネしてんじゃねーよっ！」

モジモジというかウネウネ、略してモジウネして粘ついて臭くてとても気持ちが悪い。

修学旅行の夜、ノリで好きな子言っちゃった♪ってヤツみたいな反応やめれ——と言おうとしたその時PCの画面が眼に入る。

『[http／／WIKIPEDIA](http://WIKIPEDIA) タコ 頭足綱 鞘形亜綱
(en)

八腕形上目のタコ目(学名ordo Octopoda)に分類
され……』

……ふんふん。ああね、そういうことっすか。

「おいヌメエ、ちょっと来い」

「ヌメエってなんじゃ！ テメエみたいなノリで言いおるし、プンスカ！」

……プンスカってなんすか？ タコ語？

「ポンポコ！」

タヌキ合戦か？ っつか心読むなよ……
無視して後ろの本棚から箱を手にとった。

「いいからコレしろヌメエ」

「キサマあ誰に向かって口を——」

レンズに掴んでいるものが映った瞬間、タコの薄いまぶたが見開き、漏斗から汁が垂れる。

「——お！！」

途端に魔人の語尾が吊り上がった。

その原因は箱から取り出した、じっちゃん譲りの骨董品。

「こかつ………むむっ、な、なかなか、よよよ良い壺じゃな」
こか？ こかつてなんだ？

うひい……キモ。飛び出そうなくらいにレンズ眼を見開いてガン
見している………ように見える。もう飛び出てるけど。

骨董品を左右に振ってやると、汁を垂らしたまま猫じゃらし顔負
けで追ってくる。

魔人は本能とプライドを天秤にかけ戦っているのか、ぴくぴくヌ
メヌメと触手がにじり寄っては離れ伸縮していた……

……と思ったらすぐに植物のツルが天を目指すが如く右手に絡み

付いてきた。

「どうやら自尊心は瞬殺されたようだ。」

「つてえよ、食いつきすぎだろ！ わかってたけど」

耳がないからか声の届いていない様子の魔人。

眼から潜りこむつもり？ つてくらい密着して眺め、なんかボソボソと呟いている。

「ほ、ほう……素材は赤土？ ……顔料、模様からして元禄あたり

……

……むむ、いやこれはもしや……」

ブツブツ言っつけてけど全然ちがうからね！ 別に軟体生物に鑑定力とか求めてねえよ。

ちなみに大陸土産の陶磁器だ、どっちかというと瓶だ。割られると嫌だから放っておいた。

「まあ一応は骨董品だから良いもんかもな」

なんかまだブツブツ言ってるし。

「そんなことよりこれ何色だ？ おいつ聞いてんのか！？」

ひょいと左手に持ち替えて再度左右に揺さぶる。

あつあつとか呟きながら盆踊りのように小躍りするヌメ魔人。

墨がちよつと垂れてんだけど……

「……って聞けよ！ これ何色だ？」

「あつ……青か？ 我が母海のような真っ青じゃ……い、いや黒だつ。そう黒じゃな！？」

「全然ちげーよ、やっぱ色の区別ついてねーじゃねーかつ！！」

「っー！？」

「いやもう、いーから、別に当たってもやらねえから。何そのもうちよつとだったのに！ みたいなめんどくせえ空気」

どうやら某百科事典サイトによると、タコやイカの目は色までは判別できないらしい。ついでに言うなら白い瓶だった。

振りかぶって投げるふりをすると今度は、ちよつちよつとか言っ
てゴールキーパしてるし。もうイカタコは眼中に無いようだ。所詮

はタコか、やっぱ壺には眼がないな。

ひとしきり弄んでやって、箱に入れ後ろの棚へと壺を戻した。ものすんごい名残惜しそうに見つめる魔人。

……何で納得が行かないみたいなのオーラだしてんだ？

はあはあと、肩なのかも微妙な場所を揺らし息を荒げている。散々触手を振り回し、辺りはもうすっかりヌメリまみれだった。

ふと思い出したように海洋生物独特の、感情のない眼をヌメはこちらへと向ける。

「イカカカカ。餌で釣ろうなど我輩には通用せぬわっ！」

「いや思っきり釣られてたよな？ あと切ないからその笑いやめれ」
壺Ⅱ餌って時点でどうかと思うんだけどな。

「黙れっ、海にも住めない貧弱で下等な人類の癖に。悔しかったらエラ呼吸でもしてから言うんじゃない？」

とか何とか仰ってるが、若干息苦しそうな魔人さま。

……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？

「言ってくれますねえ魔人さまよ。偉そうにしてらっしゃいますが、若干乾燥ぎみであらせられますよ？ 海水でも汲んできて差し上げましょうか？」

若干てかりが引いてるな。

「くっ、口だけは達者じゃな」

魔人、超なみだ目。ぷぷっ。

「むしろあんたらタコやらイカのほうがおクチ達者でござえますよね？ 釣りでも餌食われるわ、糸斬られるわで邪魔なんすよね、正直」

「なになっ何じゃとっ！？ ぬしらいつも手を頭に当てるウマウマーとか言うておるじゃろうがっ！！」

魔人、顔真っ赤。もう赤いけど。しかも古いよ、うひゃひゃ。

「一部では『外道』って呼ばれてるの知ってますかあ？ わかる？ 道の外。つまり対象外で邪魔者。悪魔や妖怪を指すことも。って

「うか魔人でしたっけ？ こりゃ失礼つかまつり！」

魔人、怒りにふるんふるん震えている。すっかり黙っちゃった。

「ええまあ、俺は嫌いではないですが、臭くって喰えないって人結構多いっすよ？」

「……っぐす、黙れ黙れ黙れられえ！ ひまからは我輩が捕食する番じゃっ！！」

——なッ？！ 噛んだのを突っ込む隙がないだっ？

「イカカカカ！」

不意に魔人が消えた——でも居る事はハッキリわかる。

「どうじゃ？ 我輩の種が持つ四十八の必殺技が一つ、

その名も『ミミクリイVer. ヒドウン・ステルス』の威力は！」

……うわあ、技名わざわざ言うのどおよ？ とうか若干意味被ってね？

ようするに？ 擬態？ だよな、いたなあそういうタコ。

「イカカカ、恐ろしいか？ 『ラメエー』ってゆったら許してやらんこともないぞ？」

「言わねえよっと！」

思いつきり力を込め目の前の突起部分を捻りあげる。

「いだっ！ 漏斗は敏感だから掴まないで……出ちゃう」

「……何が？ あともつかいだけ言うぞ。笑い方もやめれ、ぶっこ抜くぞ」

もう一度強くひねった。

「ちよっ、あだだだだだっ！ なぜバレた！？」

「つーか丸見え、下見てみろやタコ」

文字通り丸見え、ヌメヌメ汁にクッキリと写っている。

……海でやれっつーの。大体こんな狭い部屋じゃ意味ねえよ、アホか。

「っ——！？」

「そんな触手広げて欧米風に『ワーオ』とか分かりづらくて……」
「っ——！？」

「いやもう一回やり直さなおせって意味じゃね——」

——刹那に触手が片手と片足に絡むっ！

「なっ、謀ったな！？ このための布石かつ」

「ふふっ甘いわ。ブビッ！」

少量の黒い液体が漏斗から噴出される。

「ぐわっ墨が目につ、しかもコレまた臭えし！」

「我らは近接格闘も長けておるのじゃよ」

視覚に続き嗅覚も封じられ——いや嗅覚はとっくに鈍っていたが、ヌメリにも臭さにもまだ慣れない俺は、身動きもままならない。

「たあゝこおゝやあゝきいいいっく！！」

——ヌドムッ！！

「ごぶあっ！ でめえ……………」

ふざけた名称とは裏腹に、単なる横回し触手が風を裂く。

予想外に重い一撃が、腹へとめり込み思わず膝を突く。

材料なっちゃダメだとか、もう完全にタコだよなとか言いたいが息が出来ない。

「ぶふんっ、散々好き勝手言いおって。我輩の強さを身をもって知ったであらう」

ヌメヌメと触手が手足に巻きついてくる。勿論これも生臭い。

「かわゆいのお、おメメがウルウルじゃぞ」

「……………はっ……………んのやろお」

「楯突いたことを悔いるがいいのじゃ」

両手足を封じられ、巻きついた触手は股裂きをやるかのように、徐々に左右へと——

「おろ？」

左右へと——

「うぬぬぬ……………」

——左右へと——

「ぬめって引っ張れてねーじゃねえ……」

——左右へとは引っ張らずに、服へと侵入を始めた。

「わうひっ!!」

腰を這う粘液の感触に、最後まで突っ込めず思わず悲鳴を上げる。早く完全にマヒしてと願うほど濃い魚介の臭気に襲われ、散々聞いたはずの粘り音が囁く。まるでその音は、他人が耳元で口を開けて咀嚼するかのように、ヌツチャリネツチャリと……。

尾てい骨からゾワゾワと寒気がうなじまで登る。無意識に肩をすくめて首、尻、内股まで力が入り、手足の指が丸まって全身に鳥肌がたつ。

生まれて初めて抱くほどの強烈な生理的嫌悪感に、思わず戻しそうになる。

「うぷっ……てめえ! このっ、どこ触って、やめろこら!」

「もう『ラメエー』とか言っても許してやらぬからの、ヒョッヒョッヒョ」

顔やら腰やら服の中まで、触手に撫でくり回される。

「ヌルってマジキモイんだよ! なんで『ラメエ』とか知ってんだよ」

くそっ、悔しいが確かにピンチ。いろんな意味で。

「くふふふふ、ふはーはっはっはっはっは……」

心なしか締め付けが強まった。

「……キモイってゆうな」

またトロリ涙レンズのタコ魔人。

ええ、どんだけ繊細なん?

そういう笑い方が変わってんな、やっぱ無理してたんだなあ。

「触手はエロゲでやってろや、こんなトコでプレイしても誰得だろ!」

ぬるりと触手は顔の開口部へと進入してくる。

「のうわっ、らめっ、ふちに入っんぐっ——」

「あゝあゝあへ、あふっ」

とてつもなくいやな予感。先ほどと同様に凄まじい悪寒走る。
アカン、もう我慢デキヘン、とか難解な音を発するタコ。

ほんと臭えしなんてもの唾えさせて……

……ヤメロこらっ、いたたたたっ。

鼻の穴に入るわけねえだろが！

いやほんと無理無理！ 無理だっつの！

どんだけ頑張ってもサイズのねーよ！！

——ヌブチッ！

「あぎゃびっ！」

頭に血がのぼり思い切り噛みちぎってやった。

途端に絡みつくヌメヌメから力が抜けおち、ニユルニユルと縮んでいく。

モチユグリモチユグリ………ンギユリ。

「……うお？ 生でイケんなコレ」

さすがに新鮮だ、弾力が半端ない。若干独特の癖になる臭みとコリネバな食感。

「ぐうううう、いだいよお………キザマっ私の大事なモノに噛み付くとはあ」

「なんだ？ 腹へってんだ、もう少し食わせてくれるのか？」

「ふーっ、ふーっ。ぐぬぬぬ………ぐずっ」

……軽く噛み千切ったくらいで、ほんとヘタレだなこいつ。

「あれれえ？ オタク泣きそうなお？」

「泣ぐわけなろうがっ！」

でもレンズうるうる。

「へえ、タコ魔人様ともあろうお方が、幼稚園児ですかい？」

「だごじゃないもんっ、いがだぼんっ………」

あ、ほんと泣きそ。ざまあ、ぷっ。

「大体黙っててやってたけどさあ、タコってお前だけなんじゃね？」

お母さんは多分イカだよね？　もしかしてハブられてんのお？」

「……うぶっ……」

「そっかそっかぁ、逃げてきたわけだ。それで新しい自分ち欲しさに侵略にきたわけえ？」

「ぐずっ……うぶびっ」

触手の先を合わせてイジイジしようとしてるようだ。

……滑ってて出来てないし。あひゃ、うける。

「うえ！　デタデタまた激臭汁でたよ。もうコレほんっと公害レベルだね？　アナタ歩く生物兵器ですかぁ？」

さぁここで一気に畳み掛けるっ！

「猫ちゃんには消化不良だしさぁ、痛風に悪いし、予想は外すし、ほんと存在がもう毒っすよね。あっごめん、汚染るから近寄らないでくれる？」

「………うぶっ、ままあ、うえっ、うああああああああん」

………うつわぁ〜マジ泣いちゃってるよ？　ちよっと引くわぁ。まあとっくに引いてるんだけど。ああもう何かもわからない液体撒き散らすやめてくれえ。

言い過ぎた、なんてことは微塵にも考えないが後悔はした。なんせ臭いしうるさいからほんと困る。

「ちよっ、悪かったから（お前が）、ごめんって謝る（ふりだけど）」

そう言ってティッシュを手渡す。

「は〜、もう夜で近所迷惑（本音）だし、ねっ？　勘弁してくださいよ魔人様ぁ」

ヌメ魔人は鼻というか漏斗をかむと、すぐに真っ黒に染まる。

「ぶびいっぶべべべべべ、ぶびびいっ」

……汚えなあおい、人が出せる音じゃねえよ。墨汁はみ出てるし。ソコは鼻なのか口なのかハッキリしろよ。

「えぐっ……びっぐ……ぐすっ、ブピッ」

「おら、まだ垂れてんぞ、ちゃんと拭けよ（俺の部屋をな）」

墨やら塩水やらヌメリやら好き放題巻き散らかして、やっと落ちていたようだ。

あああ……………誰が掃除すんだこれ？ 業者呼ばないともう無理。
「びつく…………勘弁してほしいのじゃな？ どうしてもとゆうのなら
そうじゃのお——」

ちらっちらっ壺のある棚のほうをみてる。

…………立ち直り早えなおい。

「ああ？ 調子のんな。テメエまさかソレが狙いじゃねーだろな？」
元々正式に譲り受けたものではない上に、実は壺は蔵に腐るほどあるが、イニシアティブを取り返すためにも、このリーサルウェポンをやすやす手放すわけにはいかなかった。

「なっなんじゃとっ！」

…………なんでビクリしてんだ。

「キサマ、我輩との契約を反故にする気かっ」

「契約なんかしてねえだろうが。泣いたら貰えんでも思ってたのかこのゲスが」

ぶびっとまた何かを噴出される音が聞こえた。魔人は体を震わせている。

ゲソ、ゲソって——とか呟いて…………どうやら笑っているらしい。

…………おいおい、笑いのツボが全然分かんね。分かりたくもない。

「聞き間違いで受けてんじゃねえよ！」

ほんと俺をイラつかせる天才だった。

「大体よお、ちいっと泣いたくらいで海老で鯛を釣ろうなんざ…………」

「ブバビッ」

「おわっ汚えっ！」

また何汁だか分からないモンが飛び散ってきた。

…………ちっちゃなカニっぽい混じってんぞ…………アレ、何この丸いの？

「えっ海老っでっつ、ブツ、鯛っ、ブブバビッ」

何が面白かったのか、魔人はバカ受けしている。

……いや馬鹿にしてんのか？

「ぶびビィ、おもしろっそれマジウケルッ！」

「タコジョークなんてわかんねっての、墨吐きながら笑ってんじゃねえよ！」

部屋はとっくに暗黒とヌメ汁で地獄絵図だ。

「ツボツた、タコだけに。ブビッ！！」

「うざっ、そのどーよ、うまくな？　　ってのやめれや！　触手で指すのもイラっとするんじゃ！」

「ブブビビビビッ！」

……まだウケてるし。

腑に落ちない有様の部屋を、目の当たりにしてため息。

「はぁ、うざっうざっうざっうざっ！」

……どうしてくれようこのウザさ。

ヌメった竿なんかを片付けながら、後先考えずに心の中を顕にする。

「ほんとウザすぎんぞテメェ」

怒りの炎は自身でタコ焼き作れそうくらい真っ赤に燃えている。

「つーかよ、今『タコだけに』って言ったじゃねーか」

久方の逆鱗に、ピタリと墨が止まる——ビチツ！

破裂音ぽいものが耳に入った。

「あれ、今の舌打ちか？　堪忍袋の方なんか？　ああわるい、くっさい墨袋だったな。ってか舌ついてたんか、ホント意味不明な生きモンだな」

「うっさい黙れ。ちくしょう、タコ殴りにしてやるっ！」

「あっ今タコ！　って言ったよね？　間違いなくタコ！！　って言ったよね？　知らんぷりしてんじゃねえよ！　あゝもうほんとイライラするから美味しいタコス食べたいな。こんなタコ部屋でタコ入道がタコ踊りして、さぞタコ焼き屋と盆踊りじゃ引っ張りダコでし

よね。なにそのタコぐち。あ、ごめんタコだったね。口笛吹けねえのに無理すんな、墨出てンだろうがこのタコすけがっ!!」
フウツフウツヒイツ……ああダリイ。

「あ、11回もタコってゆった、ゆったね? キサマもう勘弁ならん、タコってゆーほうがタコなんですよ」

おおすげえ! 当たってるかも、タコにどんだけ敏感なん? 竿を手にしてちよっと見なおしたした。

「っせえ! てめえなんざ干物にしてタコ糸でとばしてやらあ。頭軽いから良く飛びそうだなっ!」

「連中飛べたんじゃな……ヤツらめ、恐ろしいのお」

「凧とタコかけてんだよ! 説明させんな豚野郎」

「豚も飛ぶ時代じゃからのお」

「レシプロ機で大活躍の紅いやつじゃねーよ!」

ぐあっ! しまった、やっぱジ●リ好きだコイツ。……まあ俺も大好きだけど。

「じゃあ3匹のネコの方かの?」

「森の妖精御用達バスでも見習い魔女の黒くてラブリーなのでもねーから!」

「ラブリーって……ブブツ」

くっ、猫好きのなにが悪い。あとなんだっけ……?

「えっと……あつ、あと男爵でもねえよ!」

ああ、イラつく! まだまだだなんて空気しやがって。

「ふーむ、そういえば城も老婆も腐海の少女も空を……流行ってるのか?」

「流行ってんのかもな。流行ってなくても宅急便と契約して、フジモトのどこまでぶっ飛ばしてやるから安心しろ」

「契約ということはあの火の悪魔に……我輩焦げちゃうと猿やら猪やら普段顔見せ無い親族やらたかってきて困るのじゃ。一族1香ばしいからの」

たしかに美味そうではあるな……やっぱコイツ身の危険感じて逃

げてきたんじゃないか？

「モテモテで良かったじゃねーか。頼むから、とっととタタリの神でも顔が無いのにでも食われて来いや」

「命を大切にしないやつなんて大ッ嫌いだ！」

「ああ奇遇だな、大切にしてもテメェには同じ気持ちだ。……なんでそんなジブ●だけ詳しいんだよ！」

「だって眷属も出ておるしのお、残念ながら小人少女からはまだ見ておらんのじゃ」

「しらねーよ！　ほんとしつけえ！！　いい加減スタジオ●ブリネタから離れてくれ」

「飛ぶといえはやはり石の方か？」

「戻すなっ！　ああうぜえ、もういいわ殴って黙らせる」

「ブバルスっ！！」

墨が数滴飛び散るっ！

「あがあっ！　目がっ、眼があああああっああ！　……………あッ！？」

「ウブビッ」

タコ助の薄い膜のまぶたがニヤリと弧を描いている。

「くっ……ただ墨吐いただけじゃねーか」

くっそお、のせられちまった……どおよ？　って空気されてるし。触手指すな！　なんだこの尋常じゃない敗北感……うう、無かったことにしたい。

……壺を振ってみると、効き目抜群だった。無かったことになったようだ。

「あっあっあっ」

振っている竿もどきに安物の壺を、くくりつけるタコ糸を見て思ひ出す。

「あのな、俺が言ってるのは風、空飛ぶ風。フワフワってやつ、しらねーの？」

「日本語ムズカシーネ、say English, please」

……一部やたら詳しいくせに今更かよ。

腐海の少女が乗ってるメーヴェも似たようなもんだろうが。

「カイトだよ、良いか？ スポーツカイト！ アンダスタン？」

「ほう、イ『イカ』スポーツ『イカ』トか………えへへ」

「テメツそれ言わせたかったただけだろっ！ 嬉しそうにしてんじやねーよ！！」

あっさりキレた、というより誤魔化し半分で感情に身を委ねる。

頭より体が動く。

なあに、ヌメのヤツ動きはトロい。先制攻撃さえ貫わなけりや大したこたねえよ。

もみ合いになり、絡み、ヌメリ、噛み付き、爪を立てる。

力の限り全身を引っ張り上げたその時———ヌチヌチッ、ヌズンッ！

「ぶびぎゃあっ！」

「うおおっ！？」

げげええええっ、腕っ取れた、よっ？ しかも一気に2本も。う

わわっ臭っ、良いんかなこれ、いや良くないよね？ ……ああでも焼いたらほんと旨そう。

ぷらーんと揺れる切り離された足を持ち上げる。ぷりんとして炙ると香ばしそうなソレを見つめ魔人は啞然としている。やべっ、また泣かれたら面倒だ。

「ごごごごっごめんっ！ほんとすまんっ、これやるから赦せっ」

仕方がない、ここが使いどころだろうと壺を手渡す。しかし流石に誤魔化せなかった。

「はわわわわっ。あしっ、足がつ、わわ我輩のっあわっ、いや手かの？ 前の方だから手なのかのおこれ？」

軽く錯乱しているようだ。アロンアルファある？ 木工ボンドでもイイヨとか聞いてくる始末。

しかし一方で壺はしっかり握っていた。

壺に残った足を入れたり突っ込んだりしながら、中に収まってしまいそうだ、サイズの無理だけど。

ホケーっとしている魔人、今にも泣きそうなんだが。

「うゝでえをつちゝぎいらっれー、いやーになっちゃうよおっ♪」

……およげタ●焼きくんの替え歌のようだ。

「わっ分かった、夕食のサバもつけるからっ」

「……塩焼きじゃろうな？」

うわっ無駄にグルメだこいつ。つかやっぱ立ち直り早すぎる。

いやいや、海で火は起こせませんよね。色々突っ込みたいの堪えた。

「いや味噌煮だろうな。旨いぞ、オカンの味噌煮」

「サバといったら塩焼きじゃろうがキサマっ！」

ちよつとカチンときた。

「ああ？ テメエうちのオカンの味噌煮バカにしてんのか？ あん

ま調子乗るとウツボだらけの水槽突っ込むぞコラ」

ヒィイツと声をあげ、ガクガクと恐れおののくタコ。アカン、ウ

ツボはアカンとか呟いて。

ビビりすぎだろ、魔人弱えゝ。心底哀れになるわ。

まあでも親戚中が事あるごとに食べに来るほどの味噌煮。こちらが引いてやるほど自信がある。

「ほらなんだ、薄味のものばかり食べたらさ、脂の滴るステーキ食べたくなるよな？ 軟体動物どもが牛を食べるんか知んねーけど」

「バカにするでないわっ。アレであろうが、ホラ、えっと黄色のモツサモサした……いやカッチカチだったかも？」

絶対しらねえなコイツ。軟体動物はセーフなのか。

まあみてみると言い残し、一階のキッチンからこっそり自分の分を持ってくる。一目みりゃウチの味噌煮の恐ろしさが分かるはずだ。
「っ——！？」

「どうだ？ この照り具合。シヨウガで適度に臭みを消しつつも爽

やかさと重厚さを醸し出す、芳醇な赤だし味噌の香り……」

「あわわわわわわわっ」

味噌煮の芳しい香りが周囲に立ち込める。

「脂の乗りに乗ったサバに負けじと主張する……のわっ汚エツ」

今更だが、いい加減干からびるんじゃないの？　　ってくらい滝のように流れ落ちる黒い液体。どこに貯めてんだ？

「いや、『ワーオ』はもういいから。引き出し少ねーな」

まだあわわわ、とか言いながらしきりに触手を広げている。

テメエ手足ちぎれた時より慌ててんじゃないやねえよ。

「誰が引き出しに入れて言ったよ！　あ、アリかも？　　って空気すんなっ！！」

2本ほど机の引き出しに触手を入れたまま、眼どころか全身で追っている。

「わしゅ……しかたなひっ、我輩今日の所はそれで手を打ってやろうかのほっ、ずずっ」

わしゅ？　　声裏返ってんぞ。

サバを持ち上げて左右に振ると、あっあつと再び盆踊りを始める魔人。

「あっあつ、あわっ、ほれ、じいや、のう、ゆるしてたもれ」

意味が分からなくてウザいので、渡したくないがまた泣かれては面倒だ。

仕方なく、ホラッと手渡そうとした瞬間、黒い影が皿を通過して直後にはサバは消えていた。

「てめっもつと味わいやがれ！　俺の大好物なんだぞ」

ミソとかゲソとかカユとかウマとか言いながらがつつく魔人。

「ったく、オカンはえらく手間をかけっから、せっかく今日は特別に作ってもらったつてのによお」

「今日……特別？　……………ああっ！」

なにやら真剣な様子の魔人。まぶたと思われる薄い膜が目を覆い中でギョロギョロと動いてるのが分かる。

……本当に気持ち悪いです、ありがとうございました。
漏斗から何やらニユルっと取り出し始める。異次元にでも繋がってんのか？

「忘れておった、これ太郎どのからの言伝じゃ」

……箱だ。なんていうか重箱？

黒光りしてて角が取れて四角い立方体。骨董品を見てるせいとか、素人目にも年代物で相当な高級品であろうことが分かる。

無駄に可愛いピンクと白のリボンでラッピングがミスマッチして、むしろ異様さを増している。

そしてサイドには古めかしいお札のようだ。陰陽師とかが使いそうな読めない漢字っぽいものが書きこまれてるが『開けるな危険』というのは雰囲気で分かる。

……開けていいのか開けちゃいけないのかハッキリしろよ。つかなんでオトンの名前知ってんだコイツ。

「16になった記念の贈り物とゆーておったぞ」

このタコは何を言っている……なぜそれを知ってる？

「どこの太郎さんのことだ？　ウチの太郎はとくに？　海亀丸？　と沈んだぞ」

「え？　だって太郎どの、ずっと居たぞウチに」

「はぁ？　違う太郎じゃねーの？　だってオトンは海に――」
さらにタコが何かを引きずりだす。

「――ッ?!」

ついびっくりしてタコの真似しちまった。まさかオレがコレをやるはめになるとは、オトン恐るべしだな。

……いや別に使いたかったわけじゃないからね、あつとられたって空気やめれ。

タコが持ってるのは大漁旗。見紛う事のない親父の船の証であり宝だ。獲られるタコが大漁旗掲げてるのはどうかと思う。

白いタコと赤黒いおっさんが仲むつまじく映る写真も。ただしベ

トベト。

……これ随分ちっちゃいが殻が付いてないか？　もうイカどころかタコでも……もうこの話はいらないかもな。

「ちなみに端にちらつと映ってるのが沖田くんじゃ」

気のせいか……イイ色艶で真っ赤だな、茹でたてのように。

「ちよつとまで！　じゃあオトンは何で帰ってこねえんだ？」

「そりゃあその頃戦争中だったからの」

「戦争中だったってこたあ、もう終わったんだろ？　理由になっ
てねえ」

家庭を捨てる、育児放棄、ネグレクトじゃねえか。赦せねエ！

「我が国を救ってくれてたからのお。誇れ、英雄じゃぞ」

「それも理由になっ
てねえぞ」

……大好きだったのに、ちくしょう！

「それに……我輩が産まれた。ママぎみが弱ってたから成人するま
で……」

「——ッ?!」

またしても使わされた俺を見てタコはニヤリとしてやったり顔、
きもいなあほんと。

「なっておらんのお、もっと触手を広げてこう、『っ——!?!』っ
てやるのじゃ」

ああ、なるほど……じゃなくて！

「分かるか？　『っ』が先に来るのがポイントなのじゃ」

……スルー、スルー。そうか、困った人を放っておけなかったわ
けだ。確かに見捨てちゃオトンじゃねえしな。

ふと魔人を見やる。

……もうイカどころかタコも怪しいよな、そもそもコイツ侵略し
にきたんじゃないのか？

タコはベトベトの写真を見てまたウルウル。紅潮して赤味がまし
たようだ。

……親は白いのに赤っぽいコイツ。オトンが来てから産まれたっ

つってたよな。まるでオトンが——生理的嫌悪感で背筋が凍りつき戦慄が走る！

アイデンティティが崩壊しそうな推論へと辿り着く！！

「えっ？　ちよっ、お前が赤いのってもしかして遺伝！？　は？

ちよつとまってちよつとまって……てこたあもしかしてオレはこの『タコ！』と……、っ——！！？！？」

もう『っ——！？』のやり方なんかどうでもいい。

タコは何か言っているが、無視してブツブツと独り言のように整理を試みる。

「ひいい、考えろ、そんなはずは……オトンは確かに赤黒いけどもそれは日焼けであって、地が赤いわけじゃ……いやいや成人がどうの言ってたから計算が……イヤイヤでもこいつらに人間の常識が……だからそうじゃなくてタコと人間が……そもそも人間ってなに？　どこから人間？　人が人と思っただけで実はタコ………」

意味が分からない、思考混濁、理解不能、認識エラー、お花畑が見えた。

………なのでオレは考えるのを止めた。

「で、オトン今どこに居んだ？」

「えっとお、海は御トコロテン？　星は子供の村井さん？　とか言

い残して、世界を救う旅に出たのじゃ」

「漢のロマンな、よく言ってたような」

あとたぶん子供の未来だろうな。複雑だな、あの人らしいっちゃらしい。

「ヌーだかアリスとテレスだかに行ったようじゃ」

「ムーとかアトランティスってあんの？」

和名ウシカモシカと哲学者を一緒にすんなよ。ややこしい覚え間違えしやがって。

「あとはネニユニヤとかパトリオットとかがあるの」

「はいはい、レムリアとパシフィックね、通じるのが怖いわ」

「全部で5個くらいじゃったかの？」

5と表現したいのか、触手を挙げている。4本だけど。

「うほあ、まじで？　じゃあさじゃあさ、幽霊とか宇宙人も居たりすんの？」

「バビッ」

……また吐きやがった。

「ブッ幽霊とか居るはずなろうがっ、ブブッ、ブバビッ！」

「てめえ魔人じゃねーか」

「……。っ——！？」

あ、一瞬フリーズした。やり方忘れてたな。

「わかったよわかったから、よしよし、大丈夫怖くないよ、オーマイガッてやりたいんだよね」

「優しい口調で言うでない……何か我輩無性に哀れに思われてる気がするのじゃ」

「ほくらまだまだ壺があるよ、ウザくさいから泣かないでね」

あっあつとまぶたっばい部分を弧の字にまげて飛びつくタコ。

今更だったが、周囲を軽く拭くことにした。

しかし期待を裏切らないタコは、どこから持ってきたのかペットボトルの水を浴びている。取り上げようとしたらふと異常に気が付いた。

「あれ……さっき千切れたとこ、盛り上がってないか？」

「む、これか？　これはじゃなあ……仕方ないのお——ンヌブッ！」

魔人は漏斗に触手の一本をズヌリと差し込んだ。

残りの触手も縮みあがり、その先を丸めて拳状となる。皮膚は赤味が増し美味そうな頃合い。全身が微かに伸縮運動し、痙攣でもしているかのようだ。異種間でもいきんでいる様子が分かる。

辺りに音はないのに、外の遙か遠くから徐々に振動がやってくるような重低音と高音混ざった感覚に襲われる。

そしてまるで粘膜から出てくる排気ガスのような破裂音が響き渡り、あるはずもない重圧が辺りを埋め尽くし、魔人の伸縮は幅を増し肌は更に赤みが増してゆく。

得も言われぬ息苦しさで吐き気を覚え、喉がむせ返り俺は体中が水分に包まれていることに気がつく。

……恐怖に圧されて出た脂汗なのか？

ウジュニユリウジュニユリと生理的に気持ち悪い音を立て、切れ目がさらに盛り上がりはじめ、ヘドロに生じた泡の弾ける様な音と共に伸びてゆく。

さながらプラナリアの再生を早送りの勢いで、裂ける以前の長さを取り戻し、円盤状の突起物が生え、やがてもとの手足を形どる。

「ボベツボベツボベツボベツ……」

魔人はまるでウガイしながら咳でもしてるような、洗面器に顔を付けてアアアアとやってるとちよっと戻しちゃったような、人には発声が困難な音を発している。タコが息切れするところなるんだろうか？

「……えーと、どういうことだこれは？」

水の正体は湯気だった。タコから出る蒸気のせいでサウナ状態。臭気の方はもう言うまでもない。マヒしかけの俺だから耐えられたものの、犬猫だとうなるかなど考えたくもない。

また丸いものとエビっぽいのが転がっている。

P Cもうダメだな……とか呟いていると「ごめん……ちよっと出ちゃった」——とか出た結果が知りたくないと言われたので考えることをやめた。

「ぶびー、やっぱしんどいわこれ」

「そうか、お疲れさん」

「あー肩こった、揉んでくりゃれ」

「くりゃれ、じゃねーよ。どこが肩かも分かんねーよ」

「分からののか？ コツは産卵するように、ヒツヒツフーと息めば

ニルッ♪と再生できるのじゃ」

「いや、ヒップでもルッ♪でもなくてだな」

「便利じゃろ？ 我らは餌がないとき食すしな。我輩は沖田くんのマミギミの吸盤が好みじゃよ」

「便利だな、沖田くんが無事な事を祈るよ。いやいやだからそうじやなくて」

「ほりほり、見てみ？ これで足は10本じゃな！」
うわっうざっ！

えらっそうに得意満面の魔人。ほーれほーれとか言いながら、ぷらんぷらんとタコ踊り。

大体全部で11本じゃねーか。いい加減タコだと認めろよとか思ったが、もうどうでもいい。キレていいよね。

アフロいつきまゝす！！

「てんめええええっ！ サバも壺も返せっ！ もう全部ぶっこ抜いて、活け造りだっ」

「こらっ、やめえっ、結構痛いんじゃないぞ？ 小指をダンスのかどにぶつけたくらい」

「指なんざ付いてねえだろーが！」

「まあまあ、同じパパギみをつー！？」

テメエ……せっかく忘れかけてたことを。

そうだ、もう消し去ろう。こいつの存在を無かったことにすれば
良いんだ……………

タコの目には一本角の生えた真っ赤な鬼が映り、それは殺意で体の動きが三倍に加速する。

我輩を踏み台に——などと耳に入るはずもなく、当然それは白いほうだと言うこともなかった。

——ヌヂッ

「いidaあっ！ わっ、わかった、今度アワビを持って……」

——ヌヂイッ

「あぎゃあ！　いつ、イワシもつけ……」

——ヌヂリッ

「ひぎいっ！　……コンブ」

「グレード下がってんだろうが！！」

緋色な鬼と薄紅のタコの織りなす狂気のルンバ。それはまるで軟体生物の求愛行動に見え——る訳はなく、ラメエーと喚き散らし無駄な抵抗するタコは解体されてゆく。

鬼は牙をむき出しその口は弧を描き、それはそれは本当に楽しそうにハサミを立てて、ヌチリヌチリといったぶりながら一本一本引き抜く。

やがてタコは6本目まで引き抜かれると、すっかり大人しくなった。

「あれっ？　これ抜けねーな……」

「あががががガビガビガバゲ……やべで……ぞればむり……」
びくんびくん痙攣し白目のようなものを剥いて、泡状の墨を噴出して気持ち悪いから思わず手を離れた。

考えてみるとここで腐乱したら処理するのも大変そうだし。

「ぐすっ、ひっく、汚された……」

しかし少しこざっぱりして全体が見やすくなり、本体の下に何かあることに気が付く。………また箱か？

「なんだこれ？」

「っ——！？　しもうた、術が！」

もうぐちゃぐちゃでヌメヌメでボロボロだが、何かで出来た箱らしい。え？　普段コレに収まってんの？　サイズ的に無理だろうよ。まあ今更この存在が非常識にいつでも仕方がない。

中から何か覗いている。

「……色々出てくるな」

ホントびっくり箱だ。

「こっこれは？殻？じゃ、寄るでない！」

「え？　なんだこれ、一体どーなってんだ？」

「さっ触るな無礼者っ！」

墨と粘液だらけの箱の扉を開けてみれば、何ということでしょう。顔がある、というか胴体も。全身が邪魔で良くわかんなかったけど。

「いだった、ちよっ、そこは鼻つぶごっ！」

というわけで早速箱から引きずりだした。

「あっ、見るでない！　忌々しい部分なぞ……」

例の必殺技とやらか？　それで魔『人』なわけか。

上の胴体に眼も墨を吐く漏斗もあるくせに、本来口があるはずの足の付け根に人の顔。そこからさらに人間と同じ体が伸びている。

会話はコッチでしてんのか？　鼻づまりっポイ声はそのせいか。

必死で中腰を保つものの、足の支えを失って姿勢が定まらないのか、残った触手を左右に伸ばし、両手を広げてバランスをとってプルプルしている。ちょうど飛行機と人型との中間形態のVFシリーズっぽい。

「あれ、アンタ♀なの？」

人部分の胴体はビキニを着ていた。タコのような赤ビキニだし、白い肌で際立つ。しかもなんか無駄に可愛い。

何だこの残念美人。イラっとする。

タコなのに猫を思わすちよいつり気味の大きくクリッとした目。小ぶりの鼻。ママ似なんだかシュツとした輪郭。

ちなみに猫にタコを食わせると消化不良を起こすらしいのでやめておこう。

髪にあたる部分がでかいタコに食われてる感じで、絵的には凄くシユール。さしずめ髪の毛が蛇の女の人のタコバージョンか。ただタコがでかすぎるけど。

体の方は……まあそれなりか。上下のビキニに若干残念程度の膨

らみ。ソッチ嗜好の人は飛びつくかもな。

「我輩とか言ってるのに？　ぷっ」

まじまじと観察していると、ぱっちりした目をこちらへ向け赤面している。人の部分を見られるのが屈辱なのか、肌も紅潮しピンク色に。しかしヌメリによりテラついて、妙なプレイを連想させる。

ああ、でもこれでちょうどタコっぽいな。

「えへへ。一応こちらは♀ですう」

格好付けて腰を起こしたのが運の尽き。魔人（♀）はヌメリで滑って、中腰すら保てなくなり産まれたての小鹿状態。

プルプルしてる！　ウヒヤヒヤヒヤ、オモロすぎんぞ！！

Sダック平均株価は急上昇中だ。

「キャラ変わってんぞ、『一応』ってなんだ？」

「えっとお、雌雄同体っていうか、両性具有？　その場の雰囲気
で男の子でも女の子でも」

立ち上がるのを諦めた様子のタコは、悪代官に帯を掴まれ回される「あゝれゝ」の後のようにシナを作ってグラビアっぽいポーズ。
残った触手は体にあわせてクネクネしている。

「モジモジしてんじゃねーよ！　まじキメエから」

試しに壺を振ってみると、あっあつと人間部分も踊ってこける。
やっぱ脳みそはタコだな。

「あっあつ、それでフィアンセを侵略しに来たっていうかあゝ」

「は？　今また意味不明な言葉を耳にした気が……キモイじゃなくて
気持ちわりいな」

「キモっ……」

「つまり変態ってことか、まあギリ許容範囲で使えそうだな」

「……変っ!？」

ふゝんそうかそうか、珍種だな。俄然こいつの性帯、いや生態に興味がわいてきた。ようは男の子も女の子もついてる『フタナリ』
ってやつか。

もう俺にはタコの声がほとんど届いていない。

「……そんな低俗な言葉で表現するでないわっ。魔人とは古来より雌雄同体と相場が決まっておろうが。言っておくがツガイになったらその言葉遣いさせぬからな、関白宣言じゃ！」

あ、キアラ戻った。

もういいから黙れ。人間じゃないから人権はないな。こちらの触手を伸ばす番だな

わきわきと手が迫る。

「おいなんじゃその足つきは。クラゲみたいに軟弱でなっておらんの。魚を捕まえる時はもつとイソギンチャクのように……」

「んん、付いて……？ 上が♂で下が♀ってことか？ まあ引ん剥きや分かるな」

「どこを触っておる。やめろ、そんな眼で見るなっ！ ちょ、あっ、やめっ」

抵抗を試みる魔人だが、うるさいのもう1本引っこ抜いてやった。最後の足はなんか引っこ抜いちやいけない気がした。

その頼みの最後の足もすでに力なく、自身のヌメリが仇となり、滑って転んで移動もままならない。

「大丈夫だよ。ちよつと保健体育の資料集めさせてもらうだけだよ。壺を数えてりやすぐに終わるからね」

なだめるように微笑む。

「嘘じゃッ、急に口調が優しくなったぞ！ 甘い言葉で近づく輩は危険じゃとママんぐっ」

あはは、ママと足のないMSとかけてるのかな？ 上手上手。

「ああもういい、うっさい黙れ」

触手を口に突っ込む。乾いてきた触手で縛り付ける。まさに『まな板の上のタコ』だ。

「安心して、なあんにもしないよ」

今のところはな、とにっこり笑って呟く。

最後の抵抗か、触手を吐き出す魔人。もうどうでもいいけどな。

「んぺっ！ いやっ、現在進行形でしてるじゃろが！」

「痛くないでちゅからね、コレつけてみまちょうか」

「ヒッ、ヒィィィ、なんじゃそのピンク色の変なもののはっ！　ちょっ、マテッ、ヤメッラッ……」

近所ではポッチがワオーンと、我が家ではタコがラメエーと吼えていた。

空は茜色と黄金色のボーダーを自慢している。しかし海は負けじと瑠璃色に夕焼けのプリントシャツを誇示する黄昏時。

さざなみは瑠璃から翡翠、砂浜が海抹茶から象牙色へとグラデーションで塗りあう海岸線。海草が日焼けした香りが、細やかな波のビートに合わせ潮風とダンスを踊っている。

既に夕日は海の底に沈みかけ、反対側の空には薄く煌く色とりどりの点があぶり出てくる。

夜釣りをする時と変わらないはずの上空に、何やら異なる模様が描かれる。その時マコトの背中には、冷たい水が流れ落ち寒気が走ることを自覚した。

薄い闇に浮いてきた光が、たまにごくごく緩やかな放物線を描いている空。流れ落ちては消えていくはずの1つが、徐々にくつきりと形どり、やがて沖へと落下し水平線を濃淡様々なオレンジに染めた。

新たな侵略者の福音だおとずれったが、それはまた別のお話。

「くっそっくタク漫才、いやタコント受けなかったな……」

一人文化祭の反省をする僕。

数週間ほど前、路線バスがコンビニに突っ込むという事故の裏に――プツッ、とニュースなのか微妙な番組がテレビで流れているのを苛立って消した。

常に開けている窓から空を見上げると、まるでウサギが餅を、い

や白い壺に薄い墨が吹きかけられたような満月と、一際大きく輝く星がひとつ。

コントと漫才の違いって何だ？ オチってなんなんだ？ などと1人苦悩してドリルを振る。

気分転換にPCでブログを更新。

カチッ、カタカタカタ……。

「えーっと……『そうそう、最近イイことが3つあったよ。ひとつはオカンがずっとー』、っー！？」

階段を何かが上ってくる音、扉の前で気配がとまる。

——まさか！？

ノックの音に過剰に反応して、思わず周りの大量の消臭剤を蹴散らす。

「まーちゃん起きてるのね？ ちょっといいかしら」

ホッ……なんだ、オカンか。それにしても妙な……。

「ほ、ほーい、起きてるよお」

「太郎さんから手紙きてるわよ。ひゅー、すっとなんとか言うところにいるらしいわ、何してるのかしらねえ」

「へーい」

テキサスか？

「年頃なのは分かるんだけど、ちょっと生臭いわよ、掃除なさい。

ファ●リーズもここ置いとくから」

「うーい」

何か別のと勘違いしてるけど、まあいいか。今度紹介してねとか言ってるし。オープン過ぎるのもどうかと思う。

「あ、そうそう。こないだの、美味しかったわあ。なんていうかその、癖になる臭みというか」

正直クサヤのほうがマシだと思う。ああ、マヒしてんのか。対策考えないとな。

「ああ、あれ？ とれたて、だったからね。ちょっと臭うけど」
新鮮な触手だったしな。産地直送だ。

「どこで買ってきたゲソなの？ お母さん今度お店で出したいわ」
「いや、売ってないよ。また今夜にでも貰ってきてやるよ」

あとゲソじゃないんだけどな、と思ったがまあ大差ないのでやめた。

「あらそーお、じゃあお願いね」

トントントン、と階段を下りていくオカン。

俺は押入れを開けて、ドギツイ桃色に塗った瓶の中身を見やる。
上下の瞳に生気は無く虚ろ、今も7本の足を失ってほぼ丸裸のソレに声をかける。

「つーことで今夜も領土を2つほど貰うぜ。おら、早く生やせよ」
ギャグボールという猿ぐつわを噛まされ、あーだかうーだか言っているが人間なので分かんね。

我が家があるのはウーラ半島にある幾つかの町の一つ。

閑静な住宅街から少し離れた丘の上の一角。

いつしか屋敷はこの町の観光名所の一つとなり、またホラースポットとしても有名になる。早々とオカンが店を移したのは抜け目ない。

異臭騒ぎや一夜にしてヌメリと壺に埋まるノアの箱舟、海鮮料理の強烈な誘惑と決して触れてはいけない黒い筐。そして何故か出てくる人は疲れて真っ白、まるで老人のようだ。

店の名前は作られた娘の持っていた箱から取った――が呼ばれたことは一度もない。地元では強制的に、軟体生物と乙姫に舞い踊られて、おまけに渡される臭いお土産だ、とある意味愛されている。

今夜も静かに夜は更ける。

満天の星空に包まれて、今宵もまた我が家では悲痛な叫び《ラメエー》がこだまする。

（Fin）

○月刊『ラブ☆ミミック』より抜粋／※作者調べ○

【ミミック】——数多のRPGや創作物、一部頭の中へモンスターとして登場。m i m i c r y（ミミクリイ／擬態）の派生語であるように、宝箱に化けて勇者御一行を待ち構えている。

臭い息や麻痺毒、触手を使うことが多く状態異常を招く強敵であるが、宝箱故に貴重なお宝を持っていることもしばしば。

大抵世の中の箱はこの眷属であることから、箱や扉を開けるときは慎重に装備を整えてから行おう。

【みかん箱】——主にダンボール製。机になったり、一部では家や衣装にと低コストにしては非常に用途の広い代物である。

みかんを入れたままにしておく、ひつついた部分から腐りやすく、特に下の方から凶悪な魔物に変化する。また中身が汚いおっさん、プリティな小動物などレア種もいる。

【跳び箱】——本来学校の体育館などに秘蔵される夢のアーティファクト。

大好きな女子が大股広げて飛ぶさま、ペタコンと尻餅つくさまなどは「ああ、アレになりたい……最上部のマット部分でいいから」と、思春期男子の妄想を激しくかき立てることは想像に難くない。昨今のブルマー廃止が非常に悔やまれる。

よく中に入り込んで色々とするくしない事を行う妖怪が潜んでいる。実際にやると退学になりかねないので、二次作品の中で満足しておこう。

【箱入り息子】——女性形だと息子が娘に変化。ただし使われる用途が大幅に異なることが多い。

息子は主に軟弱、非力、役不足などの侮蔑にあたる比喻が多いのに対し、娘の方は大変大事にされている愛娘であり、親ばかアピー

ルに使われたりする事から、か弱い、魅力的であることが示唆される。

昨今急増している新種の自室隠遁型生物への代名詞でもある。

【タイムカプセル】——アルミ製のお菓子の箱だったり形状は色々、各々未来の自分への手紙、大好きな宝物など入れられるものも様々で、イベント前に思い入れ深い場所に埋められることが多い。たまにお調子者が生物いれたりして、とても残念な結果に陥ることも。

互いに好きあう二人が卒業前、同級生の皆で植えた樹の下に、告白の手紙などを入れておくエピソードをよく見かける。大変腹立たしいが、爆破するのはやめよう。また皆で木下さんを植えると別のジャンルに持っていける。

ただ幼い想いであるため、片方は全く別人とくっついていたりして、残されたものは悪鬼へと変貌を遂げたり、生物入りだった時を含め人に憑依する非常に危険なタイプが多い。

【白い箱／ブタ箱】——元来治療や更生目的の収容型施設。決して作者が病弱とか頭がアレとかで、お世話になっているわけではない。【パンドラの匣】^{はこ}——ギリシア神話に登場。火を使うことを覚えた人間に害をもたらすため、作られたという娘パンドラが持つ箱。壺であったとも言う説も。様々な災厄が入っており、最後に残っていたものは希望や未来とも、また未来を知ってしまうことで夢がなくなるという絶望であるとも解釈されている。

匣という書き方はとある文豪の作品名で、作者が格好つけて拝借しただけであり、本来は普通に箱と表記するのでご注意ください。いたいた。

【玉手箱】——有名な昔話に登場するお土産。玉櫛筥が変化したとも言われる。なぜか決して開けてはならないと警告されており、それを無視して開け、老人になる結末は御存知の通り。

ある意味、酔って赤くなりクネクネしながら、「うーい、いま帰えーったぞ」なんて頭にネクタイ巻いて持ち帰り、妻にド突かれる辺り、昔のコントでよく見るアレも玉手箱かもしれない。

玉手箱が食べてくれていたかのような、その中身は過ぎ去った？時間？であり、それは結果として人々に様々な災厄をもたらす存在でもある。

もしその？時間？が前者の中身と同義とみなせれば、パンドラの箱と玉手箱、この2つの箱ルーツは同じなのかもしれない。

様々な物語に登場する入れ物だけでなく、世の中には家や種族、国や学校など、大小様々な箱があると思う。

しかしどんな箱にも共通するもの、それは中身があるということ。たとえ空っぽであっても目に見えないだけで、詰めた人の想いや思い出、またその地の空気などきつと色々入っているはずだ。

さあキミも箱を被ってミミックになるもよし、嗅いで楽しむのもいいだろう。ただし、決して好きな子を詰めて監禁したりはしないように。ブタ箱や白い箱にぶち込まれてしまうので。

（後書き）

稚拙な文章力の拙作を読んでもらって、ありがとうございます。
自分の執筆力のほどを思い知りたいので、厳しいコメントでも貰えると大変嬉しいです。

なお、別ネームですが他の投稿サイトやMIXI、ブログにも他の作品含め載せるかもしれません。同時にこちらにも明記しますが、その際はそちらも含めて御指導御意見よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7414x/>

侵略!! 箱入り生物

2011年10月21日03時25分発行